



監修

佐佐木信綱  
柳田國男  
新村出  
山田孝雄  
津田左右吉  
和田哲郎

# 宇治拾遺物語

下

野村八良校註

朝日新聞社刊  
日本古典全書

日本古典全書

「宇治拾遺物語」下 © 野村八良校註

昭和二十五年二月二十日初版發行

昭和三十一年六月五日第四版發行

印刷所 株式會社東和印刷

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

区有樂町・大阪市北区中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 二〇〇圓

# 目次

## 本文

### 卷第八

- 一 大膳大夫以長、前証の間の事……………三
- 二 下野武正、大風雨の日法性寺殿に参る事……………四
- 三 信濃の國の聖の事……………五
- 四 敏行朝臣の事……………二
- 五 東大寺華嚴會の事……………一八
- 六 獵師、佛を射る事……………一九
- 七 千手院僧正、仙人に逢ふ事……………二

### 卷第九

- 一 瀧口道則、術を習ふ事……………三
- 二 寶志和尚影の事……………六
- 三 越前敦賀の女、觀音助け給ふ事……………元
- 四 くうすけが佛供養の事……………七
- 五 つねまさが郎等佛供養の事……………四
- 六 歌詠みて罪を免さるゝ事……………四
- 七 大安寺別當の女に嫁する男、夢見る事……………望
- 八 博打聲入の事……………七

### 卷第十

|                      |   |                   |   |
|----------------------|---|-------------------|---|
| 一 伴大納言應天門を焼く事……………   | 四 | 六 吾婦人生贊を止むる事…………… | 五 |
| 二 放鷹樂、明暹に是季が習ふ事…………… | 三 | 七 豐前王の事……………      | 六 |
| 三 堀河院明暹に笛吹かせ給ふ事…………… | 三 | 八 藏人頼死の事……………     | 六 |
| 四 淨藏が八坂坊に強盜入る事……………  | 四 | 九 小槻富平の事……………     | 六 |
| 五 播磨守佐大夫が事……………      | 四 | 一〇 海賊發心出家の事……………  | 六 |

## 卷第十一

|                           |   |                            |   |
|---------------------------|---|----------------------------|---|
| 一 青常の事……………               | 七 | 七 清水寺御帳給はる女の事……………         | 八 |
| 二 保輔盜人たる事……………            | 七 | 八 則光、盜人を斬る事……………           | 八 |
| 三 晴明を心見る僧の事附晴明蛙を殺す事……………  | 七 | 九 空入水したる僧の事……………           | 九 |
| 四 河内守頼信、平忠恆を攻むる事……………     | 七 | 一〇 日藏上人、吉野山にて鬼に逢ふ事……………    | 九 |
| 五 白川法皇の北面、受領の下りの眞似の事…………… | 八 | 一一 丹後守保昌下向の時、致經の父に逢ふ事…………… | 九 |
| 六 藏人得業、猿澤の池の龍の事……………      | 八 | 一二 出家功德の事……………             | 九 |

## 卷第十二

|                          |    |                          |    |
|--------------------------|----|--------------------------|----|
| 一 達磨、天竺の僧の行を見る事……………     | 九  | 六 空也上人の臂、觀音院僧正祈り直す事…………… | 一〇 |
| 二 提婆菩薩、龍樹菩薩の許に參る事……………   | 九  | 七 増賀上人三條の宮に參り振舞の事……………   | 一〇 |
| 三 慈惠僧正受戒の日を延引する事……………    | 一〇 | 八 聖寶僧正一條大路を渡す事……………      | 一〇 |
| 四 内記上人、法師陰陽師の紙冠を破る事…………… | 一〇 | 九 穀斷の聖、不實露顯の事……………       | 一〇 |
| 五 持經者叡實、効驗の事……………        | 一〇 | 一〇 季直少將歌の事……………          | 一〇 |

|                       |    |                         |    |
|-----------------------|----|-------------------------|----|
| 一一 樵夫の小窩、隱題の歌讀む事…………… | 二〇 | 一八 貧俗佛性を觀じて富める事……………    | 二五 |
| 一二 高忠の侍、歌讀む事……………     | 二二 | 一九 宗行の郎等虎を射る事……………      | 二六 |
| 一三 貫之の歌の事……………        | 二三 | 二〇 遣唐使の子虎に食はるゝ事……………    | 二〇 |
| 一四 東人歌の事……………         | 二三 | 二一 或上達部、中將の時召人に逢ふ事…………… | 二三 |
| 一五 河原の院に融公の靈住む事……………  | 二三 | 二二 陽成院妖物の事……………         | 二三 |
| 一六 八歳の童、孔子と問答の事……………  | 二四 | 二三 水無瀬殿鼯鼠の事……………        | 二四 |
| 一七 鄭太尉の事……………         | 二五 | 二四 一條棧敷屋、鬼の事……………       | 二五 |

### 卷第十三

|                              |    |                                   |    |
|------------------------------|----|-----------------------------------|----|
| 一 上緒の主、金を得る事……………            | 二六 | 八 出雲寺別當、父の餘に成りたるを知りながら殺して食ふ事…………… | 三九 |
| 二 元輔落馬の事……………                | 二九 | 九 念佛の僧、魔往生の事……………                 | 四四 |
| 三 利延迷神に遇ふ事……………              | 三三 | 一〇 慈覺大師續續城に入り給ふ事……………             | 四四 |
| 四 龜を買ひて放す事……………              | 三三 | 一一 渡天の僧穴に入る事……………                 | 四六 |
| 五 夢買ふ人の事……………                | 三三 | 一二 寂照上人鉢を飛ばす事……………                | 四八 |
| 六 大井光遠の妹強力の事……………            | 三五 | 一三 清瀧川聖の事……………                    | 四九 |
| 七 或唐人、女の羊に生れたるを知らずして殺す事…………… | 三七 | 一四 優婆曇多弟子の事……………                  | 五〇 |

### 卷第十四

|                   |    |                 |    |
|-------------------|----|-----------------|----|
| 一 海雲比丘弟子の童の事…………… | 五三 | 二 寛朝僧正勇力の事…………… | 五八 |
|-------------------|----|-----------------|----|

|                    |    |                         |    |
|--------------------|----|-------------------------|----|
| 三 經頼蛇に逢ふ事……………     | 一五 | 八 仲胤僧都連歌の事……………         | 一六 |
| 四 魚養の事……………        | 一六 | 九 大將愼の事……………            | 一七 |
| 五 新羅國の後、金の楊の事…………… | 一六 | 一〇 御堂關白の御犬、晴明等奇特の事…………… | 一七 |
| 六 珠の價、量無き事……………    | 一六 | 一一 高階俊平が弟の入道、算術の事……………  | 一七 |
| 七 北面の女雜仕六の事……………   | 一六 |                         |    |

## 卷第十五

|                               |    |                                |    |
|-------------------------------|----|--------------------------------|----|
| 一 清見原天皇、大友皇子と合戰の事……………        | 一七 | 七 伊良緣世恒、毗沙門御下文の事……………          | 一八 |
| 二 頼時が胡人見たる事……………              | 一八 | 八 相應和尚都率天に上る事 附 染殿の后祈り奉る事…………… | 一八 |
| 三 賀茂祭の歸き武正・兼行御覽の事……………        | 一八 | 九 仁戒上人往生の事……………                | 一九 |
| 四 門部の府生海賊射返す事……………            | 一八 | 一〇 秦の始皇、天竺より來る僧禁獄の事……………       | 一九 |
| 五 土佐判官代通清、人違して、關白殿に逢ひ奉る事…………… | 一八 | 一一 後の千金の事……………                 | 一九 |
| 六 極樂寺の僧、仁王經の驗を施す事……………        | 一八 | 一二 盜跖孔子と問答の事……………              | 一九 |

宇治拾遺物語  
下

野村八良



## 宇治拾遺物語卷第八

### 一 大膳大夫以長、前駟の間の事

〔一〕〔一〕以長の事は卷五にも見える。題は寮本を参酌した。

〔二〕東三條に在る。白河天皇創建。

〔三〕千人の僧を招き、齋を設けて供養すること。千僧會とも。

〔四〕上皇・法皇のいであし。天皇の行幸に對し御幸と云ふ。

〔五〕藤原頼長のこと。忠實の子、忠通の弟。

〔六〕頼長。左府は左大臣のこと。

〔七〕先の公卿が乗り物を停めてゐたので。

〔八〕左大臣の舍人は下馬して通つた。

〔九〕左大臣は。

〔一〇〕同上。

〔一一〕敬意を表すること。

〔一二〕外の隨身は皆下馬したのに、

これも今は昔、橘大膳亮大夫もちだんが以長といふ藏人の五位ありけり。法勝寺ほふしやう千僧供

養に、鳥羽院御幸とりはのこうありけるに、宇治左大臣参り給ひけり。先に公卿の車行け

り。後しりより左府参り給ひければ、車くるまをおさへてありければ、御前ごへんの隨身おりて

通りけり。それにこの以長一人おりざりけり。いかなる事にかと見る程に、

通からせ給ひぬ。さて歸かへらせ給ひて、「いかなる事ぞ。公卿逢ひて禮節れいせつして、車

をおさへたれば、御前の隨身皆おりたるに、未練みれんの者こそあらめ、以長おりざ

りつるは。」と仰せらる。以長申すやう、「こはいかなる仰せにか候らん。禮節

と申し候は、前まへに罷る人、しりより御出なり候はゞ、車を遣り返して、御車ごくるまに

向かへて、牛うしをかきはづして、榻しきに軛くみを置きて、通し参らすをこそ、禮節と

は申し候に、さきに行く人、車をおさへ候とも、しりを向けて参らせて通し参

以長一人下りなかつたのは、これ  
が不慣れた者ならばともかく、以  
長程の老練な者としては不都合な  
ことだ、の意。

(三)前に行く身分の低い者は、後  
から自分より身分の高い者が來た  
時には。

(四)身分の高い者の車の方に自分  
の車を向けて。

(五)牛を轅(ナガエ)から外して。

(六)牛をはづした時に轅の轆を支  
へ、又は乗り降りの時の踏み臺と  
するもの。

(七)さう云ふ人には。

(八)差控へたこと。

(九)寮本「いさ」

(一〇)先日の公卿のこと。

(一一)老練な侍。

(一二)下車に都合の好いたために。

【二】(一)武正のことは卷四に見え  
る。

(二)藤原忠通のこと。

(三)忠通のこと。此の時代には攝  
關にも此の敬稱を使つた。

らするは、禮節にては候はで、無禮をいたすに候とこそ見えつれば、さらん人  
には、なんでふおり候はんずるぞと思ひて、おり候はざりつるに候。誤りてさ  
も候はで、打ち寄せて、一ことば申さばやと思ひ候ひつれども、以長年老い候  
ひにたれば、おさへて候ひつるに候。」と申しければ、左大臣殿「いさ、此の  
事いかゞあるべからん。」とて、あの御方に、「かゝる事こそ候へ。いかに候は  
んずる事ぞ。」と申させ給ひければ、「以長ふるさぶらひに候ひけり。」とぞ  
仰事ありける。昔はかきはづして榻をば、轅の中に、おりんずるやうに置き  
けり。これぞ禮節にてはあんなるとぞ。

## 二 下野武正、大風雨の日法性寺殿に參る事

これも今は昔、下野武正といふ舍人は、法性寺殿に候ひけり。ある折大風、  
大雨ふりて、京中の家皆こぼれ破れけるに、殿下、近衛殿におはしましける  
に、南面の方にのゝしる者の聲しけり。誰ならんと思し召して、見せ給ふに、  
武正赤香のかみしもに、簑笠を着て、簑の上に繩を帯にして、檜笠の上を、又  
願に繩にてからげつけて、杵杖をつきて、走りまはりて、行ふなりけり。大

(四) 忠通の邸。室町の東に在り、批把殿とも呼ばれた。

(五) 赤香は赤に黄を帯びた色。上下は直垂と袴と。

(六) 櫓の木を編んだ被り笠。

(七) 撞木杖。

(八) ことごとくしいさま。

(九) これは大層な事だと感嘆したのである。こゝの「あさまし」は褒めた意味。

【三】(一) 此の説話は今昔卷十一の修行僧明練始建二信貴山一語と交渉がある。

(二) 今昔には、名を明練、常陸の人としてゐる。縁起には明練を「命れん」と書いてゐる。

(三) 或田舎で。

(四) 弟子が師から戒を受けること。

戒は三學一、禁制のこと。

(五) 佛の新しいでにならない國。

(六) 回國修行して。

(七) のんびりと。

(八) 西南。

(九) そゝろに。何となく。別にこ

方その姿おびたゞしく、似るべき物なし。殿、南面へ出で、御簾より御覽するに、あさましく思し召して、御馬をなん給びける。

### 三 信濃の國の聖の事

今は昔、信濃の國に法師ありけり。さる田舎にて法師に成りにければ、まだ受戒もせで、いかで京に上りて、東大寺と云ふ所にて、受戒せんと思ひて、とかくして上りて、受戒してけり。さて本の國へ歸らんと思ひけれども、由なし。さる無佛世界のやうなる所に歸らじ。此處に居なんと思ふ心附きて、東大寺の佛の御前に候ひて、いづくにか行して、のどやかに住みぬべき所有ると、萬の所を見廻しけるに、坤の方に當りて、山かすかに見ゆ。そこに行ひて住まんと思ひて行きて、山の中に、えも云はず行ひて過す程に、すゝろに小さやかなる厨子佛を、行ひ出したり。毘沙門にてぞおはしましける。其處に小さき堂を建て、据ゑ奉りて、えも云はず行ひて、年月経る程に、此の山の麓に、いみじき下種徳人ありけり。そこに聖の鉢は常に飛び行きつゝ、物は入りて來けり。大きな校倉のあるをあけて、物取り出す程に、この鉢飛びて、例の物

れと云ふわけも無く。

(一〇) 厨子に納める程の小佛像。

(一一) 多聞天。

(一二) 身分が卑くて有福な人。

(一三) 此の僧は鉢を飛ばす通力を持つてゐるので、其の鉢が飛んで行くのである。

(一四) 其の鉢に品物がはいつて來たのである。

(一五) 三角形の材を組み上げた倉庫で、上代に行はれた。正倉院などがその例。

(一六) 懲ばつたこと。

(一七) 動搖する様子。

(一八) 地上。

(一九) 此の山は信貴山で、正しくは大和國生駒郡であるが、此の山は大和河内兩國に跨がつてゐるので、河内と記した。この山の東中腹に、僧明線開基の歡喜院朝護國孫子寺がある。

(二〇) 勤行する。

(二一) 取込んだこと。

乞ひに來りけるを、「例の鉢來にたり。ゆゝしくふくつけき鉢よ。」とて、取りて、倉の隅に投げ置きて、頓に物も入れざりければ、鉢は待ち居たりける程に、物どもしたゝめ果てゝ、この鉢を忘れて、物も入れず、取りも出さず、倉の戸をさして、主歸りぬる程に、とばかりありて、この倉すゞろにゆさ／＼と揺ぐ。いかに／＼と見騒ぐ程に、搖ぎ／＼て、土より一尺計搖ぎ揚る時に、「こはいかなる事ぞ。」と怪しがりて騒ぐ。「まこと／＼、ありつる鉢を忘れて、取り出でず成りぬる。それがしわざにや。」など言ふ程に、此の鉢、藏より漏り出でゝ、この鉢に藏乗りて、たゞのぼりに、空ざまに一二丈ばかり登る。さて飛び行く程に、人々見のゝしりあざみ騒ぎ合ひたり。藏の主も更にすべきやうも無ければ、この倉の行かん所を見んとて、後に立ちて行く。そのわたりの人々も皆走りけり。さて見れば、やう／＼飛びて、河内の國に、この聖の行ふ山の中に飛び行きて、聖の坊の傍に、どうと落ちぬ。いと淺ましと思ひて、さりとてあるべきならねば、この藏主、聖の許に寄りて申すやう、「かゝるあさましき事なんさぶらふ。この鉢の常にまうで來れば、物入れつゝ參するを、今日紛はしく候ひつる程に、倉に打ち置きて、忘れて、取りも出さず、鉢をさ

(三)倉の中の物はそのまゝ取つて  
よ。

- (三)皆お遣はしになりますな。  
(四)それ程入用な事があらうか。  
「こそ」の下、「あれ」を加へて見る。つまり、無いといふ意。  
(五)皆落ちついた。僧の許には一つも残らなかつた。  
(六)醍醐天皇。こゝは年號の方から申上げた。  
(七)佛式の御祈禱。  
(八)御快癒にならないこと。

して候ひければ、この藏唯搖ぎに搖ぎて、此處になん飛びてまうで落ちて候。この藏返し給ひ候はん。」と申す時に、「まことに怪しき事なれど、飛びて來にければ、藏はえ返し取らせじ。此處にかやうの物も無きに、おのづから物を置かんによし。中ならん物は、さながら取れ。」とのたまへば、主のいふやう、「いかにしてか、忽に運び取り返さん。千石積みて候なり。」といへば、「それはいと易き事なり。確に我運びて取らせん。」とて、この鉢に一俵を入れて飛ばすれば、雁などの續きたるやうに、殘の俵ども續きたる。群雀などのやうに、飛び續きたるを見るに、いとゞあさましく、たふとければ、主のいふやう、「しばし皆な遣はしそ。米二三百石は留めて、使はせ給へ。」といへば、聖「有るまじき事なり。それこゝに置きては、何にかはせん。」といへば、「さらば唯使はせ給ふ計、十廿をも奉らん。」といへば、「さまでも入るべき事のあらばこそ。」とて、主の家に確に皆落ち居にけり。かやうにたふとく行ひて過す程に、その頃延喜の御門重く煩はせ給ひて、さまざまの御祈ども、御修法、御讀經など、萬にせらるれど、更にえ怠らせ給はず。或人の申すやう、「河内の國信貴と申す所に、この年來行ひて、里へ出づる事もせぬ聖候なり。」

(二九)動きさうも無い。

(三〇)御病氣のこと。

(三一)次の文句に、劔を編んで、衣に着た護法とある。信貴山縁起の繪には、劔を綴つたものを身に纏ひ、一劔を携へた童形が二體描いてある。これは四天王のやうな護法神の化現であらう。

(三二)にかの下に、「あらん」を添へて見るとよい。

それこそいみじくたふとく驗ありて、鉢を飛ばし、さて居ながら萬有り難き事をし候なれ。それを召して、祈せさせ給はゞ、怠らせ給ひなんかし。」と申せば、「さらば」とて、藏人を御使にて、召しに遣はす。行きて見るに、聖のさま殊に尊くめでたし。かうく宜旨にて召すなり。とくく参るべき由言へば、聖「何しに召すぞ。」とて、更に動きげもなければ、「かうく御惱大事におはします。祈り参らせ給へ。」といへば、「それは参らずとも、此處ながら祈り参らせ候はん。」といふ。「さては若し怠らせおはしましたりとも、いかでか聖の驗とは知るべき。」といへば、「それは誰が驗といふ事、知らせ給はずとも、御心ちだに怠らせ給ひなば、よく候ひなん。」といへば、藏人「さるにても、いかでかあまたの御祈の中にも、その驗と見えんこそよからめ。」といふに、「さらば祈り参らせんに、劔の護法を参らせん。おのづから御夢にも、幻にも、御覽ぜば、さとは知らせ給へ。劔を編みつゝ、衣に着たる護法なり。我は更に京へはえ出でじ。」といへば、勅使歸り参りて、「かうく」と申す程に、三日といふ晝つかた、ちとまどろませ給ふともなきに、きらくとある物の見えければ、いかなる物にかとて、御覽すれば、あの聖の言ひけん

(三) まつぱりする。爽かになる。

(四) 普通の容態。

(五) 庄は莊園。

(六) 莊園の事を掌る役人。

(七) 却つて佛罰を蒙るやうだの意。

(八) このまゝで。何の御沙汰に預らなくても。

(九) こゝから話頭を轉じて、僧の姉の事を語つた。

(一〇) 氣にかゝること。

(一一) 興福寺。

(一二) 「まうれん」底本のまゝ。

(一三) 祈念申しての意。

(一四) 大日如來の夢のお告げ。

劔の護法なりと思し召すより、御心ちさはく<sup>三三</sup>と成りて、いさゝか心苦しき御事もなく、例<sup>三四</sup>ざまにならせ給ひぬ。人々喜びて、聖をたふとがりめであひたり。御門も限なくたふとく思し召して、人を遣はして、「僧正、僧都にやなるべき。又其の寺に庄<sup>三五</sup>などや寄すべき。」と仰せつかはす。聖承りて、「僧都、僧正更に候まじき事なり。又かゝる所に、庄など寄りぬれば、別當<sup>三六</sup>なにくれなど出で来て、なか／＼むつかしく、罪得<sup>三七</sup>がましく候。唯此<sup>三八</sup>くて候はん。」とて止みにけり。かゝる程に、この聖の姉ぞ一人ありける。此の聖受戒せんとて、上りしまゝ見えぬ、かうまで年比見えぬは、いかになりぬるやらん。おぼつかなきに、尋ねて見んとて、上りて、東大寺、山階寺<sup>四一</sup>のわたりを、「まうれん<sup>四二</sup>小院<sup>四〇</sup>といふ人がある。」と尋ねれど、「知らず。」とのみいひて、知りたると言ふ人無し。尋ね侘びて、いかにせん、これが行方聞きてこそ歸らめと思ひて、その夜東大寺の大佛の御前にて、「このまうれん<sup>四三</sup>が在所<sup>四四</sup>教へさせ給へ。」と、夜一夜申して、打ちまどろみたる夢に、此の佛仰せらるゝやう、「尋ねる僧の在所は、これより未申<sup>四五</sup>の方に山あり。其の山に雲たなびきたる所を、行きて尋ねよ。」と仰せらるゝと見て、覺めたれば、曉方になりけり。いつしか疾く夜の

(四四)いらつしやるか。

(四五)此の「とて」は「と思つて」で、こゝは文句が切れずに續いてゐる。

(四六)倭訓栞に「服體」の字を以てしたが、其の製は能く分らない。信貴山縁起の文では、「ふところよりひきいでたるものをみれば、たいといふものを、云々」とある。「ふくたい」或は字類抄の腹帶の事か。胴着の類でもあらう。

(四七)世間並みのも無い。

(四八)紙子(カミコ)。厚紙に柿澁を塗つて拵へた物。元來律信用。

(四九)さんぐ破損したこと。

明けよかしと思ひて、見居たれば、ほのぐと明方になりぬ。未申の方を見やりければ、山かすかに見ゆるに、紫の雲たなびきたる、嬉しくて、そなたをさして行きたれば、まことに堂などあへり。人あり」と見ゆる所へ寄りて、「まうれん小院やいまする。」といへば、「たそ。」とて出で、見れば、信濃なりしわが姉なり。「こはいかにして尋ねましたるぞ。思ひかけず。」といへば、ありつる有様を語る。「さていかに寒くておはしつらん。これを着せ奉らんとて、もたりつるものなり。」とて、引き出でたるを見れば、ふくたいといふ物を、<sup>四八</sup>なべてにも似ず、太き糸して、厚々とこまかに強げにしたるを持て來たり。喜びて、取りて着たり。元は紙衣一重をぞ着たりける。さていと寒かりけるに、之を下に着たりければ、暖にて好かりけり。さて多くの年頃行ひけり。さて此の姉の尼君も、本の國へ歸らず、とまり居て、そこに行ひてぞありける。さて多くの年比、此のふくたいをのみ着て行ひければ、果てには破れく<sup>四九</sup>と着なしてありけり。鉢に乗りて來たりし藏を、飛倉とぞ云ひける。その藏にぞ、ふくたいの破れなどは納めて、まだ有んなり。その破れの端を、露ばかりなど、おのづから縁にふれて得たる人は、守りにしけり。その藏も朽ち破れて、未だあ